重修真書太閤記 九編 九

晴
家傳
第十

和書門
類 三四〇五三 號
二二六 函
一三 架
四〇 冊

内閣文庫
和書
類 三四〇五三 號 四〇 冊
一七 函 一二 架

内閣文庫
番號 和 34053
冊數 40（19）
函號 171 45

新刊納本

共四十

重修眞書太閤記九編巻之廿五

森武藏守長一戰死之事
并池田丹後守園を破る事

長久手原の戰急にして上方勢大に亂と立過半龍泉寺山又ハ樂田の方へ敗走しけるに池田勝入斎と森武藏守とハ我から望し軍なり勝ハ三河の主となりん負ハ岩崎の土となりんとかねてハ定めし事なれハ今日を限りと身を捨て打とも射とも一足も引じ引じと競ひかゝり四方八面に切たて薙たて敵の多勢をものともせず戰ひける二

人の心を推量るに天正十二年三月十七日の夜森武藏守羽黒の八幡林にて奥平九八郎大須賀五郎左衛門尉丹羽勘介か為に打敗られ能者多く討をたりしことを無念におもひ今度あらそ花々敷軍して岡崎の城を乗取り先日の恥辱を雪くへけれといさゝに勇ミて出張をしけるにそうらハ三州勢に不意をうたれ若年の大将三好孫七郎秀次一軍もたへハ敗走し遠藤但馬守長谷川藤五郎堀久太郎秀政にても追立られ實に危急の合戰に及ひしそのきハめといへハ勝入齋と武藏守との心より起をし軍となりしハ武藏守長一眞先に進んて士卒を下知し攻

争ふそのさまをものにたとへて云へくハ長崎次郎か由比の濱の戰ひ大内介義弘か堺の浦の合戰も是にハいかて勝るへき池田勝入齋ハ自身の遺恨をはらさん為秀吉卿を勸めて中入をそうりしに岩崎の城を念なく攻落し手始よしと勇ミ立此いきほひにて三州へ亂入し岡崎を取んと掌の中のを取よひとしと敵を侮り首を實撿し居たる処へ三州勢後陣より切かゝり大将を追散し名ある侍を多く討とられしハ世に聞えし日頃の勇氣も忽にたゆミ我先にと敗走を益天正十二年四月九日の事そかし森武藏守と勝入齋と一処に打寄敵に

合すさ左右より引つゝみて敵を破る離合の陣勢開
結の軍法心よ得たる大将なりけりつハ老功なり若
又今日の軍よ負たらんハ何の面目を以て秀吉を見
んとおのゝ切しとなりしハ雨霰と飛來る矢玉をも
おそれど秋の野のをよ立なちぶ薄の穂よも似さ
すうふ三遠二州の侍どもり抜群の手柄をきんと
大身の鎗の刃廣なるをさへ素鎗よ十文字片鎌な
どの穂先をそろへ枚さきさゞかりよ押寄ておのゝ
おのゝよ突立る其勢のすさまじく又さしもけまき
ハ上方勢散々よ突立られて四度路よなつくたるよ
ふ処よ猪腰原の辰巳よあたり小高き処よ御馬印

をおし立なびハ旗本勢を操出しゝなんと見え白さき
なへの兵士七百余り森池田の勢を目の下よ見お
ろし鉄炮の筒先をそろへて打出れハ是ハ井伊万千
代直政の預る処の鉄炮よしていつもも勝まし手
たまとなれハ森池田の兵士あまりうたれよ多く討れ
なり

甫菴本よ爰よ井伊隼人佐り後裔井伊万千世と
て十九歳長久手の辰巳なる山よ三段よ備へ白
しなへの弓鉄炮の者五六百人先手を張てうしを
けまれハ堀り先勢是よ辟易し追止つて見えし処
よ久太郎もとりお走り来り使番の馬上を以てい

なりしに制し止人数を立んとすれ共まち〳〵に成
て逃るを追來りし勢なれハ早速に立得ぬと云々
白しなへさしたる弓鉄炮爰を先途と射けるに
より武蔵守なれと追立なんと大音聲を上下知を
せしとも聞と顔に見えしかハ手鎗追取走り出追
拂んとせしを鉄炮にて森か眉間を射たりけ
るに聲もたてずうつふさまにふしてけり云々と見ゆ
是ハ森を射たるハ井伊万千世の預処の鉄炮な
りと安藤彦兵衛覺書にハ森武蔵守を直次鎗にて
突ふせしと云
御旗本より安藤彦兵衛直次をもしめ究竟の壮士

池田勢の後陣より攻かゝる池田か家人に片桐半
右衛門伊木清兵衛今日を限りと駈むかふ命をお
しまず戦ふほとに三州勢も爰を大事と切むすぶ
勝入斎ハ武蔵守を援け武蔵守ハ勝入斎を見續つ
川眼さかしまにさけて朱をそゝぎし悪鬼羅刹の荒
しか如く四角八面に走り廻りて士卒を下知し戦
ひける処に井伊万千代か弓銃のもの池田と森と
の後へ廻り鈎へかけさる鉄炮に打たてられし今迠
ハ阿修羅王の如く見へし武蔵守も鐵を傾け身を
ちゞめ小膝を折て芝居にどうと打たくめらる進
み得を大須賀五郎左衛門尉康高本多彦次郎康重

水野惣兵衛忠重かくと見るよりそれ上方勢惣敗
軍と成つるぞ只平がかりに打破れと鎗を打ふり
聲を上てぞせめかゝりける上方勢ハつかれも心たゆり
ハやさけはやゆるといへども井伊万千世の打出
す鉄炮の烈さに恐怖して進みもやらず退く
ともさんかなさとハ透を伺ひ居てかり強に戰んと
もさこば濱松方すそてハ去ぬる山崎の軍に明智が天
王山を取得をして終に軍破れしことを聞知たること
なり上方勢に高みを取すなと御下知ありしかバ
ハ井伊が手の者過急に士卒をそめこめかく打とし
ハ森武藏守鐙の袖に玉三川でかり中りしとの

のかうどもさバ如斯鉄炮に打すくめられと平に
折しさてハ何とあるとへさぞ我を手本にせよと呼
はりく馬を進め三尺あまりの大長刀を水車に廻
し手負し猪の荒るが如く直政の本陣さしてかけ
向ふ遠三の壮士とも大将武藏守と見たりしかハ
我打取んとそてかゝりしかとも長一が今日の軍ぶり
日頃に十倍しあさかも猛虎狂象のあれしり廻るも
いかそうが是にハ過べきと見るものいとゞ花々し
中にもさんがハ三左衛門尉が子なりけりあはれなど
の大将も多く世にあるましと感をる人も多かり
森が郎等橋本清太夫百々兵庫各務十大夫大塚五

郎三郎来原新右衛門をはしめ誰かハ一人も後る
へき主に先たち駈走り目當と定めて打鉄炮の玉
にも怖るゝをさけされハ水野總兵衛岡部彌次郎丹
羽勘兵衛なとか勢ひもことに當りて戦へとも死生知を
の荒武者の荒にあまりて働くにそさそう防きかね
ちと白けて見えたる処へ大須賀五郎左衛門尉康
高の組に杦山孫六本多八蔵とて名誉の鉄炮あり
けるか両人いひ合を畔道を傳ひ足場をよく小
楯をとりて窺ひよりねらひを定め切てはなせハ
あやまたす森武蔵守長一の眉間の只なかに中り
しかは鬼とよはれし勇将も馬より真逆まに落

て音もさひ長久手原の露ときえにしハ哀をとゝむ
なき事共なり生年廿七歳とかや遠三の兵士等ハ
上方の大将を討捕たりと楯をたゝき箙をならし
て喧めきあへりしか森か手のものハ主の死骸を舁
あけ後陣のかたへと引退くもあれハまたハ敵に
向ひ引組てさし違へるもあり暫時の合戦に敵も
味方も多く亡ひにけり榊原小平太大須賀五郎左
衛門尉其外の将士池田勝入斎をあまさしと八方
より追取巻て責近つく本多八蔵ハ森か死骸を舁
ゆくものを追掛切かゝりしか森武蔵守とハ知ね
とも何さま大将なるへしとおのひ付その首取ん

とかく見るに杉山が鉄炮に中りて散々に打碎き
たまへバ首を取に及ばず鎧物具太刀さへうばゝるに
ぞろ／＼とけ出しバそれ／＼の分捕して引退を池田丹
波守輝重ハ寄来る敵を打散し機變をはかりて居
たりけるが味方の運も今日かぎりとおもひしが
ハ古新輝政を中にまじて伊木清兵衛を後陣となし
自身真先に進て鉄炮の烟の黒みたち／＼る真中へ
面もふらず鎗を入くれてかゝれバ十文字に突て
まくりけるその有様ないふも勝まてゆゝしく見え
たりしハ勝入齋が子なりけりと余所に見る目も
いさましく丹羽勘兵岡部彌次郎をそゝるなり是を

討んとなしけるを池田丹波守伊木清兵衛一所に
打集り切立しかバ丹羽も岡部も左右へひらきて
引退く丹波守と清兵衛と古新を伴なひ亂を立た
る三州勢を切ひらき龍泉寺のかたへ落て行池田
紀伊守之助ハ田中久兵衛が注進を聞とそのまゝ
我勢をかりて張出し敵を待て居たりけるが案に
違ハず堀久太郎が備も追立られ森武藏守ハ散々
に勇を振ふて戰ひしかども終に鉄炮に中りて戰
死しけると見るより紀伊守ハ黒き馬に打乗白熊
の采配を打ふり味方を進め戰ふ所に井伊万千
代が鉄炮に打すくめられし味方侍一同に勢をま

し振ひかゝりてかゝれば立よしかば井伊が足軽まで突
立られて引色に見えつるにより紀伊守得たりと
勇みたち進めやゝと士卒をはげまし堀が
手と一つになりかんと攻かゝる

池田勝入齋武勇の事
并三州の両金次郎の事

池田信濃守信輝入道勝入齋年つもりて四十九歳
そのかみ勝三郎といひし時より武運のおぼえ
世に聞えたりける勇将なりしが今日の軍の景氣
をうかゞふに味方危なく敗軍の機をそこに顯されし
と知といへども抑がたいの中入の軍へ入道が勧めの

るにより秀吉の心には進ましとまげて許を
しとりかゝれば岩崎を攻落しつると切として
早く引取べかりしをそのひかり深入し味方を
とく難義に及び剰森武藏守を討せそこに續いて
なきものゝ多く討死し心のの憂く居たりけるに嫡
子紀伊守之助が敵を追て大に合戰し数が所の手
を負ながら打とるくびを塩手に付赤になりて切
廻るを勝入かゝるに見ておく紀伊守は我子なが
らあっぱれ勇士や末代なりとも一人當千の侍と
云べしされども我等が若き時の働にもおのひくら
べては緩く見ゆるなり若ものとてもあなどるまじや

と云ふうちに入道旗本をくり出しあの敵どもを追
散〳〵に堀が勢と一手になり上方勢の敗らまじとさうし
恥辱を清めんと身をのたてゝおきもせしかバ
片桐土肥牧野をはじめ森寺野村なんどすゝみゆる
されしのの共眞先に立面もふらず命をおしまず
働きけるなかより松平主殿助奥平九八郎左右より
寄來り道をさへぎり喰止んと揉立たり勝入齋ハ
少しも騷がず我旗本の荒手をそてゝめて是に當り
先手の武者の氣力を助けんとさわとの處に床机を
立させ近習のものの三十騎をうりと前後に立を例
の活氣をふるひあまとてうりの小勢をふと早く打

と破り潰さるゝなりとて我等が手柄を見せよとさ
そと采配とりてふりたてゝ下知しければ相從ふ
侍とも正しく主君の眼前なり何かハせんとも猶
豫なく撃入て切廻り突かゝりなりけるまで奥
平が勢も主殿助の手の者も後ましよへおくれじと
おまり景氣のそばしさよたのもそばひがましきかゝ
のあるところへと目早き勝入そやとのめやりのの
共と短兵急にせめ立きハ三州勢心へやたけにお
のゝとも一人引二人引三人四人と引立られ五六
段ばかりも引退たり主殿助九八郎大音あげ見苦
しくも後を見せしものかなやそ某が手本を出さ

ん見習ふて働けやと鐘の響くばかりに下知しつゝ川近付ものを切て突ふせかゝり廻りしハ池田勢まで押かへされて見えたりけるの時濱松御所ハ山の半腹に御旗を立られけるが勝入斎の旗本へと操出んを御覧して池田か旗本を操出そ早打出て高名せよと仰られしかバ御旗本の壮士共承りぬと御請申安藤彦兵衛直次永井傳八郎直勝走出る我呼止られ万千代に差添手柄致せと上意ありしかバ畏りぬ誰かハ後れ可申とてつゞきいつれも馳たりけるを万千代ハいらか〳〵と得鉄炮のものを操替へおのおのに打立しハ池田入道か旗本三十人ぞかり一同におり敷て鎗の穗

先を高くなりし万千代よびかけるを安藤永井眞先に進んてかゝりけるに人々打ものゝ鍔も進んて御感状たまハりしも今日なり遅て御勘當なりしも只今なりと勇みたるハ万千代馬よりのりなび歩行立まて鎗引さけかけしハ白しなへのものとも我おとらじと續たりその中に遠州の住人鳥居金次郎と三州の住人平松金次郎とて濱松御所の近習者ありたりし平松金次郎ハ平生柔弱にして臆病者といはれしなり過し頃荒井の渡にて小田原の北条か侍茨木五郎作といひしものと船に乗合しに何とすやありけん五郎作金次郎を悪口をし

かハ定めて喧嘩になるべしと船頭もしめ心配せ
しに金次郎更に返辞に及ばず却て五郎作にさまざ
さま佞言して事故なく返りしを卑怯のものよ男
氣なしと笑ひしかども露心にかくるいろもなく
しとぞ傍輩とものさたまくに噂しけるにハ自然御闘
なも入つきと上にも何と宣ひ出さる事もなし鳥
居金次郎ハ武勇の名高きものゆへ當番のいとま
あれハ山野をかけめぐりて鳥獸をうつを常の慰となし
しけれども世に勝れし勇士なりと人も賞歎したり
しかハ是も御耳に入ありまさに別に仰出さるゝ
事もなし然るに今日平松金次郎が一番にかけ出

るを見てかの臆病ものゝいゝがなれハ今日ハ敵に
向ふとも定めて忽にうたるべしあなどれやと
見るかとすに金次郎勝入齋の床机にかゝり居たる
を見るとそのまゝ走寄を池田の郎等秋田嘉兵衛
と鎗を合ハ是長久手の一番鎗なり其次に今村衍
之助鎧とも着ず素肌にてかゝり來て竹村小平次
と鎗を合せ鳥居金次郎ハ今村淺之助笠原五太夫
濱嶋十之丞と共に打揃て突かゝれハ勝入齋の旗
本よりも渡邉靫負古田甚内片桐與三郎梶浦兵七
いづれも究竟の侍なり今日の手柄ハ我々のことと
心にしめて切かゝりしかハ鳥居今村も爰ぞ大事

の切處あり打破られてハ日頃の武邊も無になる
べし太刀の柄ハ折ミ碎けミ鎗の穂先ハ突折とも
一寸も引しとせり合なせとハ芝居ハ鳴てとりくと
ののさそうしく聞えけり井伊万千代ハいうなも
して勝入齋を打取らんと諸勢にぬきんでゝ働き
けるを見て勝入齋の手のものも片桐半左衛門河合
又左衛門あれとハ正しく森殿を打たる井伊万千代
のかさしと進ミけるか片桐も河合も先刻より大
けしき軍に鎗ハ突折鎧の袖きりおとされ兜ハ脱
て大童血眼に血刀打ふり勝入齋の面まもりけ閉り
井伊か手の侍ども是を付しとりきたり甲斐國の

住人に河合四郎左衛門と云ハ新羅三郎より以來
甲斐源氏に傳えたる殺弓の達人なりさしつめ引
つめ矢種をおしまず射ける箭に中りて死も強
勇とよはれつる池田か勢少しもはゞりて見えける
か元より今日を限りと思ひ切しとなりなしかバ
をおしもためらはべき鎧にたつ矢ハ蓑の毛に似
たれとハなりなまし血ハくれなゐの瀧となりしまゝとや
死のの狂ひと世の諺にいふか如くなりしかめとも
ハ今村桁之助竹村小平次かためニ討れてさり小平
次のかゝりて今村か首をとらんとなしけるを
鳥居金次郎鎗おつとりおやをまはしと突かゝり終

に竹村が突伏て首をとれバ平松金次郎ハ秋田嘉兵衛を討取てかなしく首をとりさかとし鳥居と共に御本陣へ参上し實検に入奉る御所にハたしに御覧の後金次郎両人とも出来したりと仰あるも荒井の渡りにて臆病を振まひしハ今日の為そとかねて知りと打笑ひ玉ひしかハそこにありし者も却て面目なしと顔をそむけゝしとあり居たり此外池田方にて古田甚内片桐與三郎梶浦兵七なとあるひハ三州方にても濱嶋十之丞笠原五大夫今村淺之助なとおなしく枕をならへたり
甫菴本に勝入斎の旗本うすく成ていよいよ危ふ

かりしかハ秋田嘉兵衛尉梶浦兵七郎片桐與三郎竹村小平太なと少もさハらて戦ひ居たりけるか此由を見るよりも手前の敵をハ追ちらし手勢引つれ助来て竪横十文字に切てまはり防き戦ふありさまたとへていはんかたもなし去ありといへとも敵ハ多勢なり味方ハ小勢なれハ相叶ハずして討死せりとあり
別本家忠日記に天正十二年四月九日井伊直政先鋒として堀秀政と戦ふ堀か手ゆるみて樂田に引退く池田かれを止むれとも秀政止まると能えず井伊か兵池田を伐と急なり池田か勢進ま

ば森武蔵守進んで戦ひ火炮に中て死を三州方
平松金次郎一番鎗を合ば鳥居金次郎も同しく
進む二番鎗なり今村術之助鎧を着ば三番鎗
を合を小野浅之助組打の功あり池田が臣秋田
加兵衛梶浦兵七郎片桐與三郎竹村小平太戦死
をとげたり

重修眞書太閤記九編巻之廿五終

重修眞書太閤記九編巻之廿六

片桐河合両臣勝入斎を諫むる事
并井伊万千代の事

去程に上方勢總敗軍となりしかバたまし勇氣た
ゆまず武邊功者のものといへとも多勢に引立ら
れける堀久太郎が心ハ思ひの外に身を脱して一
時の物笑となりし田中久兵衛尉なとの如き強に
日頃の器量に頼るに非をまさ其時の機發を取失
ひしまもわしバさへてハ天時運行の然らしむる
処なりとハ更に人力のなきとを制しなきを止むべき

さあらバ池田勝入齋ハ大膽不敵の良將なれハ敗軍を集め死骨に肉をつけ此一戰に三州勢を切破り從來の武勇を顯し自他の眼をおどろかさんと蹈こたへ諸卒をはげまし一足も引じと床机にかゝり居たりける処に最愛の聟森武藏守ハ目の前にて討死し多年付まとひつる相傳の郎等ともを半過戰死し今ハ漸母衣かけし近習の武者三四十騎より外またのりきのものなしかくてハ三州勢を切なびけ岡崎の城を襲ひとらんと抑盲亀の浮木に逢ひうどんげの花さく春をまつに似たりとおもひしかハ勝入齋も我運命をそこに終るべき時いたりぬと心たけくもおもひ極め匆々としくいさましく見えにけり爰に池田か家の老臣に片桐半左衛門尉河合又左衛門尉とてありけるを勝入齋身近く呼よせとしの年來の好を忘とも今まて付そひ居たるも其方共の心中なるも嬉しくおもふなり入道本意の如く三州を切取たらんにハ両人に城のこを共に天壽を盡をまて富貴榮花を同しくせんやとおもひしに我運命今日只今にせまりたりいかにもして両人此場を切ぬけ先手にそ合戰なる嫡子紀伊守之助とおよひ丹後守に入道討死のよしを告池田の家の後榮をとらるへしあく

と後陣に打し三好殿今をさし長ひなひく武邉功いさりなきゝ田中久兵衛なともあまれと肝とにも潰さし三好殿の陣まて如法にわしらひなひないい堀遠藤長谷川も云甲斐なくいふるまはしその内にい森武藏守も馳付へ入道もその跡と黒むへし然るを三好といふ若ものゝ軍なる様ともしらぬものと同しく打出しこそなの敗軍の兆なとおのへく口惜けれと又かり返し是と按それへ是天運いまさ時のさゝさるゝさなくへ入道廿二歳の時武藏守信行とて故殿の御弟末森におくしけるゝ故殿と御中たゝひて弓矢に及ひし時偽て御和睦のくち清洲にまれゐさ表より奥へ通なに処に待なしひて組しさ討奉りしとあり今となりてたのくへい共に主君の御子なり兄弟の中なしさへ終に和融の時もありぬへきと心あさく討奉りしをなま苦々敷おのふなり故殿御事ありとも末森殿今にましまさハ柴田も亡ひそ柴田亡ひそへ加様に出陣をさるともあるましきなりとおのふに法けて武藏守殿を討奉りしと我等か短慮の誤と返を返をも口おしゝ然ともへ此身を無ものにして武藏守殿の尊靈となさめ申なハ當家繁榮も疑ひあるましと此頃おもひよりしなり其方とも此事をお

ちもなく紀伊守にかゝるべし是や敵も追付ぬに
そはやいそげと下知せらるゝ入道が最期の用意
せんと十文字の手鎗を取て立上る
織田系圖に武藏守信行はじめハ勘十郎信勝と
いふ信長の弟なり尾張國愛智郡末森に居玉ふ
柴田勝家佐久間大學助長谷川宗兵衛山田孫右
衛門などむねとする臣たり弘治三年正月清洲に招
てだまして殺せし事ハ前に見ゆ末森村桃岩寺に墓
あり前武州大寺松岳道悦大禪定門といふ
片桐半左衛門尉河合又左衛門尉入道の口状を聞
とかく御諚の趣道理を盡されバ上ハ我々如き愚

蒙短才を以てとかく申べきに非ずといへども軍の
ならひ勝負ハ武邊によるものにあらずと傳へ承る
る鎮守府将軍陸奥守頼義朝臣ハ只七騎に打なされ
逃玉ひしも終に切勝九年の軍功を立玉ふ又右大将
頼朝卿ハ石橋の軍敗をなし木の天河にかくれ玉
ひしこともありつるか日本武将の世を開き玉ふに
非ずや只今御討死とハ殿の御短慮と憚ながら存
候御勢落うせて候へども猶いまだ二三百ハ
候一面々必死になりて働き候はゞ三州勢を切崩
し候はんに何の難きことか候はん一旦の御怒によ
りて百年の御身を誤らせたまふこと返す〴〵も勿体なし

くは敵のあまりに近つきはくぬうちに早御引取
はべしとぞすゝめしかハ入道打笑ひ両人の意見も
さることながら武将の身に取て死をへき時と生へ
き時とのさかひを知ること大事なり越後守仲時の番
場に死をし時従軍など四百三十余人あり相模入
道の東勝寺に自害せるや一族門葉八百余人と闘
郎等みな白刃の下に身を亡ぼして日頃の恩を
報をとひへ一方打破まへし必死の力をはたらく
をなどいぞ誰か否といふべきされども末代の
名とおしミ子孫の面をけがさしとおのゝか故に自
滅をしにあらざるや楠多門兵衛正成ハ古今にまく

とし良将なれバ赤坂にても千早にても京の軍にても死をせ
ざると見をそ死なざりしか湊川にてハ一族郎従六
十六人と共に死をしハ非をや是なるその死をべ
き時と死をすまじき時とを能知つる故なりとおのゝ
なべし入道おのひ切し上ハいかに詞を尽くともこ
ひるかへさき心ハあるまじ詞ハよるなき無益の舌
と動かして徒に時をうつさるゝよとて行くと
追たりそれ手鎗を取てつまらじと打なりハ方に眼
とくばりて待りけるさり三州勢ハ池田か備を目に
かけ濱松の御旗本衆面もふらず切かゝる中にも
井伊万千代真先にすゝむを見て万千代か鉄炮の

の白しるしのさしものさし万千代が前より
けふさかりおめきさけんで寄来れは勝入斎の左右
に扣えし母衣組の侍心得たりとおのおの
その得ものをおつとりて驀直に突てかゝる万千
代の手のものゝ潮のわく如く皆面もふらずかゝりしか
は池田が侍先途と切むすふ片桐半左衛門尉
河合又左衛門血刀を打ふりて前後左右へなてか
くるは十文字に切まくれとも井伊が手の者勝軍
にしたりとて大将の御馬の前なりあまさじと
入替々攻立る中にも井伊家の侍に村越三十郎は
池田が家の渡邊靫負とせり合火花をちらして

切合を甲州侍の河合四郎右衛門甲州流の殺弓引
しぼり切てはなせしかはあやまたず渡邊靫負が腰の
つがひをさてうに射たり射られて渡邊大にいかり
る當の敵の村越をすてゝ河合に向ひけるが村越
をうしろより駈よりて鎗取直し胸板より押付の板ま
で穂先白く突出をは渡邊靫負心はたけくはやれ
とも痛手なれは倒るゝを片桐半左衛門尉と河合
又左衛門尉傍輩の討死を余所に見てそのまゝ引
退くこそ何程か口惜しく又かなしけれども紀伊守
への遺言をうけつれは心ならずも一方を打やぶり
先鋒をさして落行ける井伊万千代はあまさじと深

入し是非に大将を討取らんとおめいしかハ本陣の床机をあくへに目とりて鉄炮を打せ進みける処に黒糸おどしの鎧に頭なりの甲を着し指ものゝとハさゝぬ侍三人十文字の手鎗を取て突かゝる直政をこしもさゝずに突かゝり終に一人を突伏ニ人に向て突合たり安藤彦四郎直次ハ先刻より味方か陣々をかけ廻り壮士をはげましゝし御旗本に参上しありけるか万千代のたゝかふを見て又御旗本をはしり出池田か備に馳向ふにつき然すへき敵にあはゞそれよとて突廻りける処まそらたまふ勝入斎に出合つき参らんと聲をとりけ一往一来虚々實々をさはなく戦ひけるに井伊万千代たまらハ知バ二人を敵に鎗をあはせと彦四郎見るより南無三寳万千代うたすなといふまゝに奮て突かゝる鎗のさけしけとハ勝入斎もあしらひ兼ちと請鎗となる処を踏込て突伏し処へ永井傳八郎走り来りしかハそれ首打といひをそて万千代を援く

池田勝入斎戦死の事
并片桐河合両人の事

永井傳八郎直勝といふハ三州大濱の長田平右衛門尉直吉の子と云り今年廿二歳なるに勝さし美男

子なり抑平右衛門直吉の父を喜八郎廣正といふ大濱上宮社田を領すと云り廣正の父ハ即平大夫政廣なり政廣はじめハ吉八郎といふ長田庄司忠致の後とかや忠致ハ柏原山陵天皇弟六の皇子葛原親王の曾孫上總介良兼の長子武藏守公雅の子平大夫致頼の嫡子大矢左衛門致經の後なれどハ河内守頼信朝臣よりあのうさ相傳の家人なり忠致の義朝を弑をしことを忌てしとて政廣の妻の父那波刑部少輔大江宗秀が養子として大江朝臣ふ改めしといへり或ハ政廣ハ那波四郎入道宗教の末子ふして長田が家を継しとも云るや宗教ハ那波

彌次郎宗元の子なりとハ鎌倉幕府政所の草創大膳大夫廣元朝臣の後なり傳八郎安藤とハ断金の交深かりけるよより我突ふをし勝入斎が首を討をしとりやそのうち彦四郎傳八郎相共ふ御本陣へ参上し勝入斎の首を實檢ふ入けるよ御感あさからびすつ御弓を賜らりて其勲功を賞をらるゝ御弓を賜をり次よ内藤四郎左衛門尉冊羽六大夫を御使として勝入斎が首并ふ分捕をし采配太刀を添て永井傳八郎を信雄公の陣へ遣そさる信雄大ふ悦びあひ傳八郎よ池田が帯をし篠雪といふ太刀を賜るると云々

或云永井が捕池田勝入斎の太刀差表に兼定篠の雪とあり差裏に片桐與三郎とあり長二尺三寸三分亂焼柄長六寸七分薫革巻頭角巻かけ目貫金の獅子縁赤銅二筋切羽金むく小刻鵐目金むく二重坐鍔鉄立二寸六分横二寸四分八角両ハつ笄のかさ鈆まぜうめ角筋とハ銅まぜてうめさる是を以て考ふるとハ永禄天正の頃軍陣に太刀と用ひて打刀とせしと明らかなり

又兵家茶話に遠州荒井驛笹瀬六右衛門祖父彌三郎方に傳八郎止宿し彌三郎勝入の首を濵松へ脊負參り實撿濟ひて彌三郎屋敷の内葬て一社の神と崇むと云軍ハ四月八日首を納めしハ四月廿八日なりと云り但濵松へ首を脊負ゆきさしハ何の故なるや大将ハまさ小牧山にましますをそ

安藤直次物語覺書に久太郎ハ二の手故手に不合して居けるが跡にて秀次敗軍をきゝて敵追來るにしと聞則備を立て相待さる味方の人数ハ迯散敵を長追しすぞろになりて追かゝる処を敵ハかへしてまて待受戦ふまあり味方崩を立方々へ敗北を敵此いきおいに乘長久手さして追來る処に濵松の御旗本の勢かつまとてもく山陰より敵

の向へ押出し御旗本の馬印を押立られけれハ
敵ハあれこそとてきそんて進ミ浮ミ敵間地ちかく
まで水たまりなりと有所あり敵味方暫くかゝりて
合てつまさ懸らず味方の鉄炮御旗本より間を
へだて山の尾つゞきより打かけゝると安藤彦四郎
直次（後号帯刀）御側にありけるか申様あれなる鉄炮
此方へ引うけ敵にさし向打せて可然哉と言
上しければ尤に思召早々此方へ呼へしとの仰
あれば使を遣しけれとも面々手前とさし置
足軽を遣さんと云ものなし重ねて呼に遣し
されけれハ漸鉄炮の者少々とりて來る故彦四

郎か申つる処にたかはさりけれハ案の如く敵是
に難義して軍中動揺を森武蔵守も鉄炮手を負
ひ其内敵味方の勢互にひしめきをのかけ引あ
るといへともつまさ戦ハなかりしバ両陣踏ミ
たく居るを御覧ありてやうきしとの御下知
ありとも猶容易からさりし處に御先にて
平松金次郎も鎗を合て是ありしかとも思ひく
の働あり此節御馬の先すゝミて進んでうきをさける
董僅に十四人なり其内彦四郎ハそれやくめう
敵地を見るに手負たる武者あり首を取んと進
みける処に本多八蔵傍よりかけ出彼手負に乗

かゝりたれバ彦四郎ハ先へ進む八藏が討たる敵ハ森武藏なり扨小高き処に黒母衣の武者三十人ばかりかたまりゐる処へ彦四郎鎗を以てつきかゝる續く味方の輩少々かゝるを見て畏ミけるが黒母衣の武者ともハ開き退く然る処に牀几に腰掛たる武者彦四郎を見てきりとめんと云て立上る所に彦四郎走りかゝり突倒を首を取んと思ふに長田傳八郎（後号永井右近大夫）来て其武者にのりかゝる其外にも二三人進ミけれとハ彦四郎鎗を抜て傳八に首をとらせける此武者池田勝入なり夫にて彦四郎ハ先へ進む處に井伊万千代黒母衣の

武者と組てゐるを見て詞をかけ見合せる内に万千代事なく組ふせけれハ助るに及ざれバ彦四郎申けるハ人数を預りたるものの自身の働ハ無用なり跡の人数を集らせよとて猶先へ進む池田勝九郎ハ勝入が戦死を聞て取て返し馬上にて馳来るを彦四郎突おとし首を取それより猶先へかゝりけるに鎗を打折たれハ味方の者の鎗を持けるに向ひ其鎗を借へと所望しけれともあたへず其わきなる味方の衆敵を取巻討かゝると見ゆる故彦四郎彼敵を討べき間此刀に取かへ鎗を我に與へよとて刀と鎗を取替て進

む是ハたゞしめ討さる敵の刀なるを分取しつる
なり彦四郎ハ直に其敵へかゝり討取しなりと
見ゆ今年直次廿八才と云また八三十才とも何
れか是なるをしらず勝九郎と云ハ紀伊守之助
の事なり

流布本に井伊万千代十九歳とあり誤なり万千
代ハ永禄四年辛酉の誕生二歳の時父直親朝比
奈備中守のためニ戦死しけれハ新野左馬万千
代をかくし置天正三年二月十五日はじめて御
目見しあれより仕奉り同十年十一月廿二歳元
服して兵部と稱し十二月甲斐の武田が侍山縣

が同心土屋が寄騎等を預る小牧の時ハ御先手を承る
ゆゑ赤旗さして赤漆具足なりしかバ見る人赤鬼と稱し
けるとなり然れバ万千代といふ名ハ小牧の時稱をとべか
らず又安藤彦四郎直次井伊万千代衆道の事を記せ
其事實信をへがたし因てあれども又傳八郎と勝入
との組討全く虚妄なれバ同しくあれと消る

紀伊守之助ハ父の戦死も知らず樂田をさして進みけるが跡
より競ふ三州勢勝鬨を作りつゝ追來るに心ならずふりかへり
みれハ味方の敗軍口々に勝入斎殿討れさせ給ひしと告け
るまゞ紀伊守大に驚き父の討れし由を聞ながら何とぞ獨
のがれんと甲の緒をしめ馬の頭を立直させハ片桐半

左衛門かゝり來るそのまゝたち身に立矢ハ蓑けの如く
折かけ大童の姿にて溜息繼つゝ入道殿のかく仰られし
ことをバ御忘れ給ひや平に落させ給へと轡にとり付いさむ
れども更に聞入ず家督のことハ古新にたのむなり我ハ入
道殿の御供して死手三途の先がけせんと一鞭あてれバ馬を
きかりよさをいされバ半左衛門も手ハ負たりあれども止る力なく
くのり上りて見送るうちに紀伊守と見失ひ止ことを得ずしてなく
落て行方しれバ河合又左衛門も勝入齋に引かれし龍泉寺山
の方へ落來りしに渡邉靭負が戰死をして骸をかくし帯居た
りし刀ハ正宗二尺八寸妻子へかたミにまゐらせんとて涙とともに取上てあれも樂田へ落けり

重修眞書太閤記九編巻之廿六　終

重修眞書太閤記九編巻廿七

池田紀伊守之助戰死の事
并濱松御軍慮卽智の事

池田勝九郎之助今ハ紀伊守といふ勝入齋の長男
今年ハ廿六歳なり長久手の軍敗れしかバ樂田さ
して落行けるに敵の中より聲高く池田勝入齋を討
たりと呼はりけるを聞て胸もくろさ實に然るか
と聞耳たつる処へ敗軍の士卒ちりて來り入道殿
にも討れ給ひぬと告げれバ紀伊守落る涙を押え
父討死しあひてのち落のびハ家名を繼ぬとの仰を

は片桐河合なりたゞしうちに承たるさりながら三途の川死出の山獨越行ならんとおもへばいかにも哀しさそ弓矢取身は名をこそをしけれ父とともに戦塲を逃たらんものと誰かはいふべきぞ待をれや今追付可申そとゆひつゝ馬の頭を引返し鎧の上帯つよくしめ勝ほこつたる三州勢の中へ面もふらず切て入薙立薙ふせ前後左右に目を配り馬を駈けれは參州勢ひろへたけしと云なからら紀伊守一人に揉立られ四度路になりて見えけると安藤彦兵衛直次きつとみて天晴大将や鎧の紋をたしかに見れは池田が一族とおほえさり勝

入齋とは突止たりとて永井傳八郎にゆづりたり是も劣らずしきぞとて打捕んと鎗引そばめ小踊りして馳むかふ紀伊守も安藤彦四郎とは見知たり父に鎗付しと聞はまことか突ふせて當座の仇をむくいんと三尺余の大太刀を眞向にさしかざし馬を駈寄一討と切付る彦四郎も迯付ずるにあくみあへむかふは池田勝九郎今は紀伊守渇たりやと聲かけ双方一度に打合を互に名譽の剛の者請つながしつ一交もをびあしらふさり紀伊守は今日討死と思ひ定めし軍なり三州方そは安藤彦四郎なき武士なりかつは父のかたき死出の山越さひ

しさふ幸の道連ぞ拙なる退をと呼ゝりつゝ打ね
ふ太刀の鋒より散を火花のをけしくて彦四郎も
汗水になりぬれハ大事の敵なり手間取りちふま
たのや人の助來ん早く打取勲功の賞はあるりら
んとつくれハ秘術ハ東海道に並ひなき濱松ふりの
穂長の鎗透間なけきハ紀伊守も心をとくさき手を
つくれともそれハ彦四郎請鎗にのそ成ゆけハ紀
伊守増々氣をとけまし是非に打取冥途の旅に同
道し先立し父の勝入齋に土産とせんと心をつく
し手をとくさく彦四郎ハ今朝ふりうふき敵おゆく打
たりしと中ふも勝入齋父子共に討取ハ名譽なりらん

と思ふにより南無や八幡大菩薩力を合をなへよ
こ心に祈念し聲をとり上りつゝさと突ハ紀伊守り
射向の板を突碎きあまる穗先に脇腹をくさとつ
く急処の痛手にをそれしもたまらひ馬より下へ眞
逆にこうと落彦四郎かけより押えそ首をうちき落
を是を見て三州勢一同に聲をうけあく安藤彦四
郎ふく仕より御手柄ひと式代しひとしく万歳を
祝して鬨を作る勝軍なをいさましけきと此勢を脱
さび樂田なる羽柴秀吉の陣處に押掛たらへハ只一
のこに採おとし秀吉を打とるかさもなくハ上方
へ追かへをうニ州に一つハあるそつましと總軍

あさりに勇みたつと物頭衆もこゝろやすからずさらハ御本陣へ伺ひ御さし圖に信をてんといへハいづれも然るべし御本陣までも異儀あるべからずとてや申さへとまかり立しが諸物頭衆うちそろひ御本陣へ参られハ猪の腰原の林のかげに御陣を設けられ外幕内幕嚴重に引まはし中に敷皮敷帖その上に御床机を立御弓御矢の飾首帳の式とゝのへ南天の手のごひ手水鉢種々の故實を正し首ども實検ありける中にも勝入齋の首級に於てハ一城の主といひ織田家の縁者にして一方の大将なり自餘のものに混ずべからずとありて甲斐

源氏に傳ふる式とも尋ねあひけるに後三年の軍にて武衡が首を八幡殿の實検ありし時の様をしりしハ覺えしのあるを委細に申上しかハそれハ秘藏の事なりしが然るべしとてまづ御座を東におしむけて御床几に敷皮をかけ南より北に向ふて井伊の兵部敷皮しきて首帳を前に置てかしこまりしハ近習衆三人北より巽に向ひて敷皮の上に蹲踞し御弓御矢を持御床几の後に御馬廻り衆五人おなじく敷皮に着御手拭御匜をとる井伊兵部首帳を取て天正十二年四月九日於尾州長久手合戰池田勝入齋首安藤彦四郎直次鎗を付永井傳八郎

直勝首を打捕之とよみ上る時安藤彦四郎ハ御前に向て畏り両手を地に着て平伏をなし永井傳八郎が打と持首の右頬を御覧に入りしかハ朴の木の葉なりその時御馬廻り衆ゑい〳〵とう〳〵と唱へ終るから御匜の役者伺候して御手を清さる御手水をとられハ御手拭の役者御手拭を進る時總軍一同よりちさう〳〵と十聲ほと唱ふるなりその次に首帳の役人池田紀伊守首安藤彦四郎直次鎗を付打捕なりと讀上る後の式前と同じ首一つ御覧あることに清水をめしゝ事我邦上代の風俗にて死穢にあへハ解除をするとの殘れるなり加様の御式と

もとゝりし頃諸物頭衆追打の事を申上しかハ上に聞食と御氣色あしく何と申そ上方勢を追打をんと若き侍ともかこゆるとや鳴呼味方に養ふの左ハとに武く勇めるハ必定天下を切鎮むへ兆と知もさり能々褒美してとらをまたゝし物頭とものそゆる計を能とをハ軍の進退を知と以てその能とするそうし敵も敵によるものなり羽柴秀吉ハそのうく木下藤吉郎とて右大臣信長公の御草履取しのかなりら意ありて侍の負に入物頭となり墨股の城主となり近江の淺井を亡ぼして小谷の城に廿万石をへて賜ありそれより西國の

討手として播磨に下向し別所を亡ぼし浮田を降し毛利と軍して数城をうちとり右大臣殿の仇を報じ葬儀を取行ひ柴田を滅したるまで一事として誤りしことなく今まで上座なりし大名を我家人と同じ様に召仕ひ其計りしごとく其策せしに勝ざりしこと凡人とおもはるまじ池田勝入齋が中入して急に引上げ終に討死しつることハ全く秀吉の意とおのれど實に勝入齋の心よりおこりしことなるべしされハ父子共に戦死して中入の恥を敵に処と知るてましと秀吉しらぬといふ旨あらし知たらんにハ秀吉それぐに備を設けて待あるべし敵の備の定まりし処へ打寄て何の手柄のなるべきと昔楠正成の天王寺へ出張をし時初ハ六波羅の討手立わしもなく負て引返しけれバ重ねて六波羅より宇都宮彌三郎公綱をさし下されたり楠が手の者宇都宮と戦んといひしに正成陣を引て戦ずバ公綱たけくして正成弱きにあらねども公綱が手の者ハれのひ切死を以て軍とのぞり正成が勢ハ勝て心に敵をあなどる侮る心を以てたのひ切し敵にあさずと危ふしといひて正成が引退し心をたのへハ池田と森とを打て心おごりし三州勢何とて秀吉が勢に對揚をなすべき勝て兜の緒をしむるとハ今の

時と云あり急ぎ味方の諸将を引上べし使番のもの共其意を得よ早々と仰られしかバ何れも畏りと御請して乗出し龍泉寺山の麓まで馳出しものを申の刻の終りまで皆呼上けるに何とも聞ねバりして打けるよりて使番衆大音に上意なり御諚ゆと聲々によばはれバ是ぞと勝たる軍を何とて此まゝ引取べき秀吉の新手出張あらバ願ふ処の幸なり上方勢の軍ぶり恐ろしかりしバ樂田の陣と追拂ふべしといさみけるを大須賀五郎左衛門尉水野總兵衛榊原小平太次第くに馳来り引取ゆへくと下知し鐘を鳴して呼集めしかバ何も

一処に打寄て此競に樂田よりぞ夜討をべし必定勝軍となるべきと各まて我々に引上ると心得をと不審たりしが三人衆大将の御諚ゆ森池田の討死に敵いよく用意して備厳重なるべけれバ面々寄あふとも十分の利あるまじきなり其上に軍の本主ハ北畠殿なり當方ハ援兵なり秀吉より如からハ當方なりに應をへし當方よりかゝるに及ふべからずとの仰なりと下知しければ何も申べき理なく引返しけるを以て士まへその夜小幡に入御ありて用心きびしく備を分たれ□本多豊後守廣孝の勢を龍泉寺山の山間にかくし置き秀

吉より援兵の來るを防げとて策を細々と仰含め
られ然るに夜に入て初夜を過れども更に援の
來るべき音もせねバ豊前守恐の者どもを少しく
殘し置小幡の御陣へ參上しバ叔まさに小幡の御陣中
へ本多八藏どの召し出され其方森武藏が死骸を見
付なバ太刀鐙なりとも分捕をして如何なる心
ましきやと御諚ありけれバ八藏ハ畏りとまり御
勢の進むより跡に付て走なるが手負たるものハ
安藤彦四郎鎗を付ると同時に組付しは処彦四郎ハ
八藏に任せて猶先へ進みしに依て手負を能見バへ
ハそや死果てハ其上に眉間を鉄炮にて打れ首も

見苦敷ハゆゑ打取不申但太刀ハ切のものと見ハ間
あさうに有之ハ死骸をためし見ハに金胴を着た
るまで二川に切てありしハまさしあまりにめでしくハ
間に分捕仕ハ鐙ハ毛引小札にて勝れたる製作にて
金物に鶴の丸を打てハよりのしや森武藏にてハあ
らざるかと存ハてそこ取ハへども死たる者の具
足ハゆゑ打をそらハと言上しバ上にハ唯打笑せ給
ふのみにて何とも御諚なし鳥居金次郎おなじく
召出され其方ハ日頃に似合ハ臆病のものといはれ
し平松に先を越されしこと殘念なりと御諚ありてた
しかなる御褒美なしとぞ二人が蟹江に戰死を

し張本なりと後にハ思ひ知れたり
或云森武藏守所帯刀來國行長二尺五寸亂燒銘
二字と云又ハ兼元にて二尺八寸とも云

小牧山諸將評定の事
并本多平八郎忠勝出勢の事

羽柴宰相秀吉卿ハ樂田の陣に在て中入の一左右
を待れけるに岩崎どれハ打落しぬれとも長久手原
於て合戰最中の由注進ありけれハ秀吉卿さても
さても濱松の軍立まことに透間なし近頃の弓取り
なりと感歎いたされける処へまたもや早打來り三
州勢おもひ寄ぬ後陣へ切りかゝりしにより三好殿

のろくも打負ぬれハ長谷川遠藤堀久太郎にて戰ま
けて追々是へ引退きたりしと申けれハ秀吉卿大
に驚かれ扨ハ殘念や勝入斎ハ打死をせしなるへし
さりなから森武藏も脱るまじと大息継て
宣ふ処へ長久手の軍敗れ森武藏守ハ鉄炮に中り
死し勝入斎嫡子紀伊守之助戰死しけるにより家
臣あまた討死し總敗軍となりし趣を言上しけれ
ハ秀吉卿立上らせたまひ三州勢左様に勝軍したらう
んにハ下々まて上方勢を心易くおもひて居るらん
其處へおし寄只一戰に打碎き三州勢の鋒をおりて
肝潰させんと鐙を取て肩に投かけ馬引やつと宣

へハ御別當の藤八郎承りぬと申もあえバ大鹿毛に梨子地の鞍紫手綱うちかけて引出されハ秀吉御ゆるりと大輪に乗玉ひ鞍の上まて高紐かけ續け若者共と大音に呼はりて乗出し玉へハ誰かハ一人も後るへき追々に駈出し勢ハ三万餘されとも名譽の大將なれハ馬かけながらも備を立隊伍を定め玉ふ事平場の指揮とこそ見えしかゝれバ先鋒次鋒の配分までいふかひたりともぬ日頃の調練目さましかりける次第なり爰に三州遠州の御勢酒井左衛門尉忠次松平主殿助家忠兩人の郎從三千餘石川伯耆守數正内藤彌次右衛門家長酒井與四

郎重忠三手の家の子凡千五百余本多平八郎忠勝六百余合せて五千餘騎にて小牧山を御留主とし処長久手にて御合戰御勝利のよしを傳聞りつゝとも會合評定しけるハ今に始ぬとなから御軍法の圖に中りし事感し奉るも憚あり但秀吉卿へ定めて長久手へ馳向ひ玉ふらん我々此御陣を守りて徒に日を送らんと然るへからバ秀吉卿の後陣に就て追掛へきやいかゝ面々計ひ玉へとありし時本多平八郎忠勝生年三十七歳膂力まさに壮に氣ハ一世を覆ひつへし進ミ出て申けるハ風の前に火を放ちたる如く手をやき秀吉なり長久手へ

馳向ひ味方勝軍して油断の処を急に攻たて打立なかりん然者樂田の本陣ハ却て空虚なるへしいさや爰の御留主居を引分樂田にありしものを火を掛て焼はらハその儘に秀吉驚て取てかへさんとすへし其時此方より掛向ひ道筋の在家を焼立なから秀吉の勢ともろともに狼狽困窮なすへし味方前後より切かゝらハ突立たらんに勝利を得んと疑ひなしと申けれハ酒井左衛門尉忠次松平主殿助家忠内藤彌次衛門家長何れも最と同心しけるさま忠勝ハめつらしき申さるゝ処至極の妙計なるへし然者我々加勢を引うけて押寄へしといさみ立ける時石

川伯耆守数正つく〳〵と案して申けるハ忠勝の計ひ事なる処よろしき謀とおもへれとも却て味方敗軍の兆なるへく存ハ其故ハ秀吉の勢十二万と聞り長久手へ向ふ処三万余人と云ハ樂田にいまた八九万の勢ハ丈夫なるへしその大勢の中へ味方二三千の小勢にてうけ向ひたらんにハ何とて勝利あるへきや御下知もなきに打出て味方を損しなならさへ小牧山の本陣まて打落されなハ何とせんさや伯耆守に於てハ同心仕りかたしと申ハ是ハ忠勝か申処必勝の計策なり秀吉まさに難義なるへしと推量しつるなり是を支えしとて伯耆

守か大坂に趣きしのちまたおのひしかまじけり酒井左衛門尉松平主殿助かゝりて石川を疑ふか故にたやすく軍を發さバ何さま御下知なきは大切なる御陣を楼出んも後勘その恐れなきは非ずと云て人数を出さバ本多もまた数正とつなかうおのへハそのまゝにして我持口へ引取梶金平を呼て斥候に出しけるか暫時ありて立かへり敵の容子へうかゝ惣軍たしかに三万餘り但秀吉なり當方の斥候に出しゝ山村十内と申のに行逢ひ間それ違ひ様に打果してかへて十内か首を出し忠勝大に悦び物見かのあきを打たる条近頃以て珍らしく

秀吉鯨の勢あれバ我鯆となりてこれを破るべしとて六百余騎を二つにわかし分梶金平三浦九兵衛牧惣次郎梶二郎兵衛以下三百余騎を引率し長久手さして馳たりけるを石川伯耆守数正此よしを聞心中まづハ平八郎定めて秀吉に喰付後陣を害するならん秀吉ほどに難義なるべしとハおもひなからともさんかくなかりしハ平八郎我儘なり御許も無にみだりに御留主居をすてしも自由なり以の外とそしりけるとも酒井忠次松平家忠ハ結句平八郎ハ勇ありて時機を知り忠ありて變化を悟る万夫不當の侍やと舌を振ふて感じけるとなり

樂田より龍泉寺まで凡三里半に遠し龍泉寺より猪腰原然して長久手なり

重修眞書太閤記九編巻之廿七終

国立公文書館
National Archives of Japan